「あんっ……ふああぁっ……や、止めて。アステリアさんっ……！」

　浴室に、まだあどけない少女の甘い嬌声が響いていた。

「ふふっ、可愛いですよシルフィさん。まだ何も知らない身体に女の良さを教えるって……最高です♪」

　すっかり普段の真面目で清楚な影はなりをひそめ、アステリアはまだ性の快楽を知らない無垢な少女の身体に、その快楽を刷り込む悦楽に頬を緩めていた。

　アステリアもシルフィも、一糸纏わぬ生まれた姿のままでお互いの肢体を絡ませるように密着している。浴室の中にはアステリアが持ち込んだマットが敷かれ、アステリアは自分の身体に塗り込んだオイルをシルフィの身体に、自分の身体を擦らせながら刷り込んでいた。

「あっ……ふぁっ……んんっ……」

　母と同じ黒髪を長く伸ばし、今はそれを後ろでまとめている。まだ成熟しきっていない少女の身体は、まだ女性らしいボリュームには足りないものの、胸や尻は徐々に女性らしい丸みを帯びてきているということで、正に発展途上といった体型だった。

「シルフィさんは、いくつになるんでしたか？　１３～１５歳くらいでしたか？　それなら、もうオナニーの１つや２つ、経験はありますよね？」

　アステリアがオイルを乳首にも塗り込むように、オイルに塗れた指でシルフィの未発達の乳首をコリコリと摘まむ。

「ああああっ……な、なにこれ……だ、だめぇ……アステリアさん」

　アステリアの腕の中でビクビクと震えるシルフィ。身体がそれをまだ快感と認識していないため、シルフィは未知の感覚にただただ身体を震わすことしか出来ない。

「この年齢で、私の極上エロソーププレイを味わったら……ああ、ステキ♪　もう人生取り返しがつきませんよ♡」

　まだ満足に年端もいかない少女を、性の――しかも女性同士の快楽漬けにすること。それを思うだけで、アステリアの股間からはドロリと愛液を溢れさせてしまう。

「ネーレさん、いかがですか？　世界で一番可愛い娘が、今から私に寝取られてしまいますよ？　うふふ……女性同士の気持ち良さに逆らえないっていうのは、ネーレさんが身をもって知ってしまいましたもんね」

　グチュグチュと身体を擦らせながら、アステリアは視線を側にいるネーレへ移す。

　ネーレも丸裸の状態で、アステリア達と一緒に浴室内にいた。彼女はバスタブの縁に座り、マットで絡み合うアステリアと娘の絡みを、息を荒げながら観察していた。

「お、お願いアステリアさん。シルフィは……娘だけは許して」

　しかしそう言うネーレも、娘の濡れ場を見て股間を濡らしていた。その様子にアステリアは唇を歪ませて笑いながら、シルフィの身体を撫で回す。

「んああっ……あんっ！　ど、どうしてこんなことするの、アステリアさん！　ひゃんっ……あ、あああ……んあああっ……助けて、お母さん！」

　アステリアの官能的な手つきで、媚薬成分をたっぷり含んだオイルで発情したシルフィの身体は敏感に反応する。首を、肩を、鎖骨を、二の腕を、乳房を、腹を、腰を、太ももを……シルフィの身体のあらゆる場所をアステリアの手が這いまわっていく。

「はぁっ……はぁっ……シルフィ……」

　アステリアの手で悶えて甘い声を漏らすネーレは、そのまま無意識に股間へ右を伸ばすと、指で秘裂をなぞり始めていく。

「そうそう。それが正解です、ネーレさん。何せ特別オプションで、私にネーレさんの通う学校のスクール水着を指定したんですから……母娘で私に分からせられたかったんですよね？」

「ち、違う……んあ……あああ……っ♡」

　しかしネーレの指は止まらない。股間だけではなく、乳房にも手を伸ばして揉み始める。そんないつもの母が絶対に見せない雌の表情に、シルフィはショックを受けたように目に涙を浮かべていた。

「お、お母さん？　何してるの……？」

「オナニーですよ、オナニー♡　私とシルフィさんのソーププレイをオカズに、とっても気持ちいいオナニーをしてるんですよ。シルフィさんも知ったら、きっと病みつきになりますから、じっくり教えてあげますね」

　にっこりと笑いながら、シルフィの耳を舌で舐り、とんでもないセクハラをするアステリア。そんなショックを受けているシルフィの太ももを撫でていたアステリ

アの手が、すっと付け根の方に上ってくる。

「あっ、だめ！　汚い……！」

　媚薬オイルで強制的に発情させられたシルフィの身体は、それが快感だという認識が出来ないままに、開発されていく。アステリアの指が秘裂に触れると、クチュリという感触が分かる程に湿っている。そこをアステリアは愛おしそうに、ゆっくりと指を動かして擦り上げていく。

「んっ……はぁぁ……ち、力が抜けちゃう……ひゃんっ……首、舐めちゃいやぁ」

　優しく秘裂を愛撫しながら、マットの上でアステリアはシルフィの背中に自らの乳房を擦りつけるように身体を動かし、首筋に舌を這わせていく。

「私に身を任せて下さい、シルフィさん。そうしたら天国に行けますからね」

「い、行きたくないそんなところ……はぁ、はぁ……はぁんっ！　む、胸も……そんなに先っぽばかりコリコリしないで……っ！　せ、背中にヌルヌル柔らかいのが……あああああ……身体が溶けちゃそぉ♡」

　オイル塗れで滑りがよくなり敏感になった肌同士が、グチュグチュと音を立てて擦り合う。熱く火照った肌同士の密着に、シルフィの身体は女同士の触れ合いを、快感を刻まれて順応していく。

「ああぁぁ……男を知らないこの身体に、私が女の良さを刷り込めるなんて♡　たまりませんっ……」

「ひっ……あっ！　そ、そこダメっ……！」

　反射的にシルフィは太ももを締めて抵抗しようとするものの、その言葉通り力が入らない。逆にアステリアはシルフィの後ろ側から太ももを持ち上げて股を大きく開かせると、もう片方の手で秘裂を弄っていく。

「ああ〜〜っ……あっ、あっ……いやっ……止めてぇ！」

「ほら、ネーレさん聞こえてますか？　シルフィさん、とっても気持ち良さそうな声を出してますよ。初めて利く娘さんの雌声、興奮しますか？」

「あ、あぁぁ……お願い。もう止めて、アステリアさん。私、おかしくなるっ……！」

　うっとりとした表情でアステリア達の絡みを見つめているネーレは、開いて緩んでいる秘裂へと羞恥心なく指を挿入しながら、激しくピストンさせていた。グチュグチュと卑猥な水音を立てながら、愛液がダラダラと流れ出ている。

「お、お母さん……助けて……っひゃ？」

　目に涙を溜めながら、娘の姿で興奮している母へ助けを求めるシルフィ。アステリアはそんな彼女の開いた太ももを、自分の足を絡めて開かせたままにすると、自由になった手でシルフィの顔を自分の方に向けさせる。そして首筋から頬に掛けて舌を這わせていき、その小さな唇を奪いにいく。

「やっ、いやぁぁ！　キスは、最初は好きな人と……んっ……ちゅっ……」

　誰もが夢見るその行為は、呆気なく霧散する。アステリアの柔らかい唇がシルフィの唇を塞ぎ、啄むように吸い立てる。

「あむ……っんん？　っや……舌、汚い……ちゅば……っちゅ……」

　瞳をギュッと閉じて抵抗するシルフィの唇を、アステリアは舌を伸ばして舐めまわし、こじ開けるようにする。それでも唇を硬む結んでいるシルフィに、秘裂を弄る指の動きを激しくしていく。

「んふっ……んっ……んむううっ……」

　刺激が強くなり、アステリアに抱きしめられたままビクビクと身体を震わせる。敏感な性器を弄られながら、唇はねっとりと柔らかく熱い舌の感触が、シルフィの頭の奥をボーっとさせていく。

（ど、どうして……私、女の人とキスしているの？　お、おかしくなりそう……頭も、身体もっ……）

　シルフィはビクビクと身体を震わせ続けながら、徐々にアステリアの舌を拒む力が弱まっていく。その緩んだ唇を、アステリアは強引に割って入り、遂にシルフィの口内で舌を捉える。

「んぐ……んれぇ……れろ……」

「れろれろ……っはぁ……ちゅば……んちゅ」

　獲物を捕らえた肉食獣のように、アステリアは貪欲にシルフィの幼い舌を味わう。唾液を溢れさせるほどに送り、ピチャピチャと水音を響かせ、秘裂をごしごしと指で擦る。

「……んぁ……れろ……あああ……アステリアさん……キス……もう、いやぁ……んむ」

「ふふふ、どうして嫌なんですか？　ちゅば……んむ……こんなに気持ちいいの

に……れろ……ちゅば……ちゅっ……」

　アステリアの舌が激しく動き、シルフィの舌と擦り合わせていく。キスが激しくなっていくのに連れて、秘裂を弄る指の動きも早くなっていくと、そこからあふれ出る愛液の量も増えていく。

　粘膜同士を接触させながら、敏感になっている性器を優しく官能的に刺激されていく。それは単純な快感だけではなく、雌としての多幸感が得られる。まだまだ純粋で何も知らないシルフィの脳が、同性の雌によって雌の快楽と幸せを学習していく。

「はぁ、はぁ……だ、だって……好きになりそう……アステリアさんのこと♡　女の子同士なのに、アステリアさんが好きになっちゃう♡　ちゅば……ちゅっ……」

　抵抗感が強かったシルフィが、徐々にアステリアに身を任せるようになっていく。アステリアのキスにも、少しずつシルフィの方から反応するようになり、唇を開きながらアステリアの甘美な舌を受け入れていくようになる。

「嬉しい♪　私もシルフィさんのこと、大好きです。愛していますよ♡　ほら、シルフィさんも舌を伸ばして、愛し合いましょう♡」

「ら、らめ……はぁ、はぁ……れろ……れぇぇぇ……れろれろれろ……っ♡」

　思考も理性も緩んだ今のシルフィの状態で、その誘惑を振り切ることなど出来なかった。シルフィはためらいがちに舌を伸ばすと、伸ばされた舌にアステリアの舌が蛇のように絡みついていく。するとシルフィからもアステリアの舌を求めるように動き始める。

「あぁっ……こんないやらしいキス……好きになっちゃう♡　アステリアさん、好きっ♡　ちゅば……ちゅっ……好きに、なる……れろ……はぁぁ……ちゅば」

「その調子ですよ、シルフィさん♡　れろれろ……ぢゅるっ……ぢゅううっ……ぢゅばっ♡」

　伸ばされたシルフィの舌を、アステリアはフェラをするようにしゃぶりつく。たっぷりとシルフィの舌と唾液を味わって口を離すと、２人はすっかり積極的にお互いの舌を貪り合うような激しいキスをする。

　そんな初めての大人のキスにうっとりとなったシルフィの秘部を、アステリアは絶頂に追い立てるように指で再び擦り上げる。

「っあああああああああ？　あ〜〜〜っ♡　だめぇっ！　何かくるううう！　アステリアさん、何かくるのっ！　身体が飛んじゃいそうっ！」

　未知なる絶頂の予兆に、シルフィは不安の嬌声を浴室に響かせる。そこには確かに強烈な不安があるが、それ以上にここまで雌の快楽を教えてくれたアステリアへの期待があった。

「いいですよ。人生初めてのアクメが女性同士なんて、とっても素晴らしいことですよ。そういうときは飛ぶじゃなくて、イクっていうんです。大声で教えて下さい」

　アステリアが微笑みながらカプリとシルフィの耳朶を甘噛みする。それがスイッチになったようで、シルフィは一気に下腹部から性の熱が込み上がってくるのを感じる。

（て、天国に行っちゃう……も、もう無理っ……！）

　ピンと四肢を伸ばし、全身に力を言って、シルフィは初めての雌の絶頂を口にする。

「イ、イク！　天国に、イクっ♡　天国にイクううううううううううっ！」

　言われるがまま、腹の底から大声で絶頂宣言をしながら、シルフィは頭が真っ白になる。身体が別の生き物のように全身がビクビクと勝手に痙攣してコントロールがきかない。あるのは今まで味わったことがないような快感と、圧倒的な多幸感。

「あ……あはっ♪　き、気持ちいい……あああ……幸せ……」

　緩んだ唇から唾液が零れ落ちて、ようやくシルフィの脳がそれを快感だと理解する。あどけないその顔が、性の快楽を知った雌の表情でうっとりと笑みをこぼす。

「良かった♪　これでシルフィさんもレズになれましたね。さぁ、もっともーっと気持ちいいレズプレイをたくさん覚えましょうね」

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼

　場所をリビングに移した後も、アステリアはシルフィへ女同士の快楽を刷り込み続けていた。

「あぁぁぁぁっ♡　あ〜んっ♡」

　ベッドの上に横たわったアステリアの顔を跨ぐようにして、シルフィがすっかり雌の快感を知った甘い喘ぎ声を漏らしていた。

　シルフィは全裸ではなく、通っている学校指定のスクール水着だった。それを肩ひもはずらされて膨らみかけの乳房が丸見えになっていて、股間の布地もずらされ、秘密の場所も露出している。

　その露出している秘裂へ、アステリアは舌を伸ばしていた。

「き、汚い……アソコ舐められて……あああああんっ♡　だめぇ〜〜っ♡」

「ん……ちゅ……シルフィさん、自分でおっぱいを弄るんですよ。ちゅば……ちゅば……」

　溢れ出てくる愛液を啜りながら、アステリアが指示を飛ばす。

　快感を完全にコントロールされているシルフィは、そんなアステリアの指示に逆らえない。自分で乳房を揉みしだきながら、指で先端部を弄っていく。

「んっ……ふっ……あああぁっ♡　指、止まらないっ……はぁ、はぁ……気持ちいいっ♡」

　噛み殺しても漏れてしまう喘ぎ声。シルフィは口角から唾液を零しながら、夢中で自分で乳房を弄り回していく。

「何が気持ちいいのか、きちんと口にしましょう。そうすれば羞恥心が無くなっていって、快感と欲望に、もっともーっと素直になれますよ。んぢゅるるるる〜〜〜っ」

　アステリアは両手でシルフィの太ももを固定するように持つと、そのまま一気に秘裂に貪りつく。

「っひゃあああああああっ♡　あんっ♡　あああぁっ……気持ち、いいっ♡　クンニが気持ちいいっ♡　あそこを……おまんこを舐められる、クンニが気持ちいいですっ♡」

　浴室でアステリアに教えられた性知識を、まるで解説するかのように口走る。そうするとアステリアの言う通り、身体の奥底からゾクゾクとした興奮が走り、愛液の量が増して理性が焼き切れていくのを感じる。

「シルフィさん、私のおまんこも舐めて下さい。女同士、一緒に愛し合いましょう」

　ソファに横たわるアステリアがパカリと股を開く。とても神職に就く者とは思えないはしたらない格好だった。

　シルフィは、その開かれた中心部からムンムンと香る濃密な雌の匂いに引き寄せられるがごとく、ふらふらと上体を倒していく。そしてアステリアの股間に顔を埋めると、舌を伸ばしてそこを愛し始める。

「あああんっ♡　イイですよ、シルフィさんっ♡」

「ふあああっ……アステリアさんっ……♡　れろ……ちゅば……私も、気持ちいい♪　女同士のシックスナイン、気持ちいいのっ♡」

　教え込まれた性知識を披露しながら、シルフィは女同士の快感に嵌っていく。２人は愛液を啜る音を立てながら、熱心にお互いの秘部を貪り続けていく。

　そしてそれを見ながら、ネーレはディルドーを使って自らの秘裂を慰めていた。

「はぁっ……はぁっ……ああ、シルフィ……可愛い娘が、アステリアさんとレズってる♡　うっ……っく……す、すっごぉい♡　サイコーのオカズになるっ♡　はぁっ、はぁっ……わ、私も加わりたいっ」

　先ほどから傍観ばかりで快感の輪に加われないネーレは、とうに良識も理性も蕩け切っており、スクール水着姿の娘が快感に溺れていく様を見ながら自慰に勤しみ続けていた。

「はぁ……はぁ……イク♡　また天国にイキそうっ♡　おまんこ、天国にイッちゃうっ♡」

　頭脳明晰だったシルフィは、すっかり語彙が無くなりながら、嬉々として絶頂宣言をする。するとアステリアがシルフィを絶頂に追い詰めるために舌を暴れさせるように動かすと、お返しとばかりにシルフィもアステリアの秘部を懸命に責め続ける。

「っあああああ♡　シルフィさん、イク♡　私もイキますっ……ああああっ、すごい舌遣いっ♪　イクううううううっ♡」

「アステリアさんっ♡　い、一緒に……お願い、一緒に天国にイって下さいっ♡　はぁぁ……イク、イク、イクっ♡　いっちゃうのおおおおっ♡」

　ベッドの上で２匹の雌はビクビクと身体を震わせながら、同時に絶頂に達する。

□■□■

「はぁ、はぁ……もっと……アステリアさん。もっとぉ♡」

　陽も沈みかけて夕方になる頃、ネーレ家での雌達の絡み合いは続いていた。

　水着までも剥がされて再び全裸に剥かれたネーレは、リビングの床に身体を横たわらされていた。そして片脚をアステリアに抱きしめられるように持ち上げられる格好で股を開かされながら、秘部同士を擦り合わせられていた。いわゆる松葉崩しという体位です。

「ちゅば……んちゅ……ちゅ……」

「れろ……んむ……」

　腰を動かし秘部を擦りつけているアステリアには、横からネーレが唇を重ね合わせながら、乳房を弄っていた。

（あああぁ……これがハーレムというものなんですね♡　生きてて良かった……気持ち良くて幸せですっ♡）

　母娘共々、自ら女同士の道に引きずり込んだ悦び、アステリアの脳内はすっかりピンク色に染まっていた。ネーレと舌を絡ませながら乳房を弄られ、腰を動かしてまだ幼い秘裂の感触を自分の秘裂で味わう快感に、圧倒的な多幸感を覚えていたのだった。

「んあっ♡　イクぅ♡　アステリアさん、もうイっちゃいそうっ♡　おまんこ同士を擦り合わせる貝合わせで、おまんこがイキそうですっ♡」

（あああぁ……♡）

　完全に快楽に溺れた証左のように、学んだ性知識を口にしてアステリアに媚びてくるシルフィ。その様子にぞくぞくと、心底幸せそうな表情を浮かべながら、アステリアは腰の動きを止める。

「っんあ……あああ……な、なんでぇ……？」

　昇りつめそうになっていた中途半端なところで快感を止められて、シルフィはもどかしそうな声を出す。

「はむっ……ちゅば……イキたいですか、シルフィさん？」

「ちゅ……んちゅ……っあ♡　アステリアさんっ……そこ、いいのっ♡　もっと乳首コリコリして……ちゅば……んっ♡」

　ネーレと舌を絡めあい、乳房を弄り合いながら、アステリアは意地悪そうな声でシルフィに問いかける。

「イ、イキたいっ♡　天国にイキたいのっ♡　イカせてぇっ♡　アステリアさん、お願いっ♡　イカせて、イカせて、イカせてっ♡」

　最初はあれだけ抵抗していた少女が、今や自分から腰を動かしてアステリアの秘部に自分の秘部を擦りつけていた。そんなシルフィの反応満足したアステリアが、ネーレの後頭部を優しく押し下げると、自分の乳首を加えさせる。

　ネーレは素直にアステリアの乳首を吸い立てると、アステリアは腰の動きを再開。グチュグチュという愛液の音を響かせながら、シルフィを絶頂へと追い立てる。

「あひいいいいい〜〜〜っ♡　イクうううっ♡　気持ちいい〜〜っ♡　気持ちいいレズセックスでイク♡」

「あっ、あっ、あっ♡　ネーレさん、すごい吸い付きっ……わ、私もイキますっ♡　はぁ、はぁ……シルフィさん、好きって言いながらイッて下さい♡　自分の脳に焼き付けるんです。女が大好きだと、女の子しか愛せないと、女同士でしかセックス出来ないと」

「んあああああっ♡　あ〜〜〜〜っ♡　ダメダメダメぇぇぇ♡　もう私、レズセックスしか出来なくなるっ♡」

　乳房をネーレに吸われながら顔を上気させるアステリアは、容赦なく腰を動かし続けて、シルフィに抵抗の余地を与えない。

「す、好きっ♡　私もアステリアさんのこと、好きっ♡　ううん、女の子大好きっ♡　もう女の子しか愛せないのっ♡　女同士のセックスしか出来ないっ♡　好きっ、好きぃぃ♡　レズセックス、大好きぃぃぃぃ♡　イクうううううううううっ♡」

「おっ……おおおおっ……イ、イク♡　レズ堕ちおまんこ気持ちよくで、イキましゅううううっ♡」

　アステリアもシルフィも、だらんと舌をだらしなく伸ばしたまま、同時に絶頂に達して潮を噴き合う。

「はぁ……はぁ……き、気持ちっいい〜〜〜♡　純粋無垢な美少女をレズ堕ちさせるの、興奮しゅるのおっ……お、おほっ♪　シルフィしゃああん……」

「あひっ、あひっ♪　あしゅてりあしゃん……ちゅば……れろ……れろ……んぐ」

　汗だくになって快楽を貪った２人は呂律が回らなくなるほどに疲弊しながら、絶頂の多幸感に包まれながら舌を絡ませ合う。

「あ、ああああ……私もっ……私も仲間に入れてぇ……れろ……あむ……」

　そして取り残されていたネーレもそれに加わり、３人は延々と舌を貪り続ける濃厚なキスを続けるのだった。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼

　数日後。

　ネーレの家では、久々に父母娘３人揃っての夕食を取っていた。

「そういえば、最近成績が落ちてきたんだって？」

　決して責めるような口調ではなく軽い調子で父が聞いてくると、シルフィは「うん」とうなずく。

「そうか。まあ、学校の成績なんてあんまり気にするなよ。お前の母さんなんて、勉強全然出来なかったんだからな。シルフィの方が頭良いんじゃないか？　なあ、ネーレ？」

「う、うん。そうだね」

　茶化すように言ったので、てっきり異議を唱えてくると思ったのだが、意外に大人しい反応で父は少し意外そうな顔をする。

「あははは。ネーレも自分が成績悪かったから、シルフィに強く言えないんだろ？　ま、成績優秀だったら、冒険家でしかも武闘家なんでやってないよな」

　なんだか微妙な空気になった場を笑い飛ばすように、父は明るく言う。

「えへへ。大丈夫だよ、お父さん。私、今楽しいこと見つけたから」

「ほう？」

　やんちゃな父とお転婆な父の間に生まれた娘にしては、やたらと勉強好きの真面目な優等生だと思っていた。冒険者夫婦の間に生まれたというのに、将来の夢は学者や神官だというのだ。決してそれが嫌だとかいうことはなかったが、心のどこかでもの寂しさのようなものも感じていたのも本音だった。

　だからそんな娘が勉強以外に楽しいことを見つけたなどと初めてのことで、父は思わず興味を引かれた。

「なんだなんだ？　もしかして父さんの仕事に惚れたか？　冒険者でも目指したいのか？」

　ニヤニヤとしながら父が聞いてくる。自分と同じ仕事を目指すというのなら、父として嬉しいことこの上ないことだった。

　しかしそんな父の期待は無惨にも裏切られ、シルフィは明るい笑顔で「ううん」と首を横に振る。

「お父さんには内緒♪　ね、お母さん？」

「そ、そうね……」

「――？」

　いつも勝ち気で明るいネーレの態度が、やけにしおらしく感じて、父は怪訝に思う。

　が、その違和感は曖昧のままで、それ以上のことに気付けることはなかった。

「お父さん、明日からまた出張でしょ？」

　カチャカチャと食器の音を立てながらシルフィが聞いてくると、父は「ああ」とうなずく。

「気を付けて言ってきてね。その間、私とお母さんはと～っても楽しいことしてるから♡」

「お、おお。仲が良いんだな。父さんだけ仲間はずれで寂しいよ」

　そういって微笑む娘の顔は、父が今まで見たことのない顔だった。そしてその側で、何故か大人しく顔を俯かせている妻の姿。

　父が気づけたのはそこまで。

　妻も娘も顔が上気し、父以外の物をその瞳に映しながら雌の顔になっていることには、全く気付けなかったのである。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼

「お母さん。もっとお尻上げて」

「う、うううう……」

　寝室の床で四つん這いになったネーレは、娘のシルフィに向けて尻を突き上げていた。そのシルフィの腰には、バンドでシーツの上からディルドーが装着されている。アステリア愛用の、男性器を模した特製ディルドーだった。

「くすくす。女同士の味しか知らない娘さんに、これからおちんぽ入れられると思うと、どんな気分ですか？」

　アステリアはベッドに腰掛けながら股を開き、自分の指で秘部を左右に広げていた。そこからはむっとした発情した雌の匂いが漂い、タラリと愛液が糸を引いて落ちている。

「す……すごく興奮します……アステリアさんに仕込まれた、シルフィのテク……楽しみ過ぎます」

　拗れた性癖を告白させられて、ネーレも秘裂から愛液を垂らしていた。太ももを伝い、既に床まで湿っている。

「お母さんってば……はぁ、はぁ……エロ過ぎだよ。入れるよ？　入れちゃうよ？　アステリアさんから貸してもらったおちんぽ♡　お母さんを犯すの、すっごく楽しみ♡」

　目を爛々とさせながら、シルフィは幼い顔を嬉々とさせながら、母の秘裂へ向けて腰を押し進めていく。

「ふっ……あっ……あああ……」

　ディルドーの先端部がクチュリと音を立てて、ネーレの秘裂に沈んでいく。愛液で蕩けきっているそこに、ネーレはゆっくりとディルドーを深く進めていく。

「あ、はぁ……おちんぽで女の人とセックスするの初めて……絶対、ぜーったい気持ちよくするねお母さん♡　はぁ、はぁ……♡」

　シルフィはぼたぼたと唾液を零しながら腰をどんどん突き入れていく。ネーレの秘裂は全く抵抗なく、喜んでディルドーを剥か入れながら膣肉で貪りついていく。

「んっ……ふあ……ああああ……」

「入った……入ったよ、お母さん。どう？　お父さんのちんぽと比べて、娘のちんぽの味はどう？　気持ちいい？」

　ディルドーを全て挿入しきったシルフィは、息を弾ませながらゆっくりと腰を前後し始める。

「あんっ……んっ……ああ……す、すごい……私、今娘に犯されている……ああっ、興奮するっ……夫のちんぽより、気持ちいいっ♡」

　背徳の行為に、ネーレは呆気なく夫を裏切り、娘との禁忌の快楽にあっという間に溺れていく。そんな母の様子に興奮したネーレは、アステリアに教えられたとおりに、腰をリズミカルに降り始める。

「んっ……ふっ……ふぁっ……ああ……シルフィ、上手よっ♡　セックス上手っ♡　お母さん、気持ちいいわ……あんっ……♡」

　そうしてシルフィの腰突きが始まって甘い声を上げ始めるネーレに、アステリア

は股間を突き付けながら見下ろす。

「ネーレさん。私に何か言うことはありませんか？」

　あくまでも高圧的にではなく、優しく慈悲深い声で、アステリアはにっこりを微笑む。

「あ、あああああ……ありがとうございます。アステリアさん、ありがとうございます♡　私と娘をレズにしてくれて……娘にちんぽを使ったセックスを教えてくれて、ありが――っふあああああ♡　だ、だめっ……シルフィ激しいっ……ああああっ……気持ちいいっ♡」

　まだあどけない少女が、男顔負けなくらいに腰を前後に振って、パンパンと肉をぶつける音を立てる激しいセックスをして見せている。

「はぁ、はぁ……ああああ……私、今お母さんとちんぽでセックスしてるっ♡　楽しい、楽しいよアステリアさんっ♡　私、ちんぽ生えていないけど、お母さんとのレズセックス、すっごい楽しい♪」

「ふふ、良かったですね。ほら、ネーレさん。私達も楽しみましょう♡　ネーレさんは私を気持ちよくして下さいな」

　ベッドから立ち上がって、アステリアは自分の秘部をネーレの眼前で広げるように見せると、ネーレの舌が伸びて来て、既に濡れているその割れ目をなぞるようにしてくる。

「っあぁん♡　クンニ、とっても上手になりましたね♪　ああっ……そこ、いいっ♡」

「ア、アステリアさん……っ♡　キスしよ……キスっ♡　私、今すっごく興奮してるっ♡」

　シルフィが小柄な体を曲げると、アステリアも上体を曲げて、ネーレの背中の上で２人は舌を絡め合わせる。

「んぐ……はむ……ちゅば……ちゅっ……」

「ちゅっ、ちゅっ……ちゅ……れろれろ……っはぁ……おいしい……ちゅばちゅば」

　唾液をたっぷりと含ませた濃厚なキス。ネーレの背中にぽたぽたと二人の唾液が零れ落ちながら、シルフィは夢中で腰を突きまくっている。

「っあああああ♡　すごく気持ちいいっ♡　シルフィっ、もっと激しく突いてっ♡　突

きまくって♡　娘のちんぽが、すごく感じるのっ♡」

「お母さん、お母さんっ♡　愛してるっ♡　大好きだよ♡　お母さんっ♡」

　歪んだ愛を叫びながら、シルフィはアステリアと舌を絡め続けながら激しく腰を打ち続ける。その内アステリアの手がシルフィの小柄な乳房に伸びてくると乳首を指でつまむようにして刺激する。

「んあああああああっ♡」

「今から毎日ねちっこく乳首を刺激しておきましょうね♡　大人になる頃には、とっても下品で大きな乳首に発達して、乳首だけでイケるようになりますからね」

　唇に付いたシルフィの唾液を舌で舐め取りながら、アステリアは痛いくらいに強くシルフィの乳首を強くする。するとシルフィは身体を弓なりに反らせて喜びながらも、ネーレへの腰突きが止まらない。

「あ゛〜〜〜〜っ♡　おちんぽ突きながら、乳首コリコリされるの、めっちゃ気持ちいいっ♡　マジで気持ち良すぎるっ♡　いい、いいっ♡　乳首勃起しちゃうっ♡」

　語彙を失い汚い言葉を吐きながら、唾液を零して夢中で母を犯し続けるシルフィ。ほどなくしてネーレが限界を迎える。

「うあああああっ……イクっ♡　娘にイカされちゃうっ♡　娘のレズセックステクが凄くて、おまんこイクうううううううううっ♡」

「はぁ、はぁ……イ、イッて……お母さんっ♡　アステリアさん、私もイキたいっ……お母さん犯しながらイキたいっ♡　乳首、もっとコリコリチュバチュバしてぇぇっ♡」

「ああああああんっ♡　ネーレさんっ……もっと舌入れて下さいっ♡　私のトロトロオマンコ、もっと舌でグチュグチュで掻きまわしてっ！」

　絶頂が近い雌３人は、それぞれ甘い嬌声を重ね合わしながら、最高の瞬間に向かって高め合ってイク。

「イ、イクっ♡　イクうううううう♡　ちゅばっ……んちゅううっ……イ、イグっ♡　娘チンポで、イクうううううう♡　んほおおおおお〜〜〜っ♡」

　シルフィに併せてヘコヘコと腰を振るネーレが一足先に絶頂を迎える。そしてその後すぐに、アステリアに乳首を甘噛みされながら指で弄られているシルフィが

「わ、私もお母さんと一緒にイクっ♡　おちんぽでお母さん犯しながら……んっ……ほおっ……♡　アステリアさんっ……歯が当たって……き、気持ちいいいいいいい〜

〜〜っ♡　おほおおおおおおおおおおお〜〜〜っ♡」

　少女とは思えないくらいの野太い声を出しながら、シルフィが腰を深く突きいれると、ネーレの身体がビクンと反応して、ほとんど同時に絶頂する。

「わ、私も２人と一緒にっ……イ、イキますっ♡　あ゛っ、レズ堕ち妻のクンニ、気持ちいいっ♡　おまんこイクっ♡　イクっ、イクっ♪　気持ちいいの、くるううううううっ♡」

　そして最後に秘部をネーレに舐られているアステリアが絶頂に達し、３人がビクビクと大きく痙攣を続ける。

「はぁ……はぁ……気持ちいいよぅ♡　レズセックス、本当マジサイコーに気持ち良すぎぃ♡　お母さん、こっち向いて。イった後のキス、だいしゅき……ちゅば……あむ……」

「わ、わらしもしゅきよぉ……シルフィ、だいしゅき♡　あいしてるわぁ……んちゅ……ちゅば……」

　四つん這いのまま振り向いたネーレは、シルフィと濃厚なキスを交わす。ぴちゃぴちゃと音を立てながら、今から２回戦が始りそうな勢いで、母娘はお互いの舌と唾液を貪り続ける。

「２人ともエロマッサージ師になる素質充分ですよ♡　うふふ、キモヲ様っ……早速２人のスタッフ――しかも母娘というレアものを手に入れましたよ」

　元の人格がすっかり崩壊し、性欲の権化へと戻ってしまったアステリアは嬉しそうに微笑みながら、母娘のキスに参加し、３人の雌は舌を求めあう。

　そしてその日も次の日も、アステリアは平凡な母娘は女同士の快楽を刻み込み続けていき、自分と同じ犠牲者を増やしていくのだった。

チョロイン２人がオイルマッサージ店でNTR快楽堕ちするまで
〜Request Episode〜
終わり